『虞美人草』死の描写

Junko Higasa

『虞美人草』第十九章に、漱石は藤尾の死を美しく描いた。その情景はどこか寒さを感じさせる。それは哀れみや悲しみという寂しさからではない。生と死がやや伏し目がちに、藤尾に向かって並列に静かに佇むところの寒さだ。その静けさは「悲劇」を感じさせる。生と死が背中合わせにあるうちはまだ喜劇である。けれど双方がどちらからともなく自然に肩を並べて佇むとき、それは本当の終わりを意味し「無」という空間に帰る。だからこそ藤尾の亡骸は美しい。漱石の筆は最後まで余念なく色彩の美を加え、その有色の意味を無色の釉で覆った。以下にその表現を見ていこう。

まず『春に誇るものは悉く滅ぶ』―これは甲野家に重ねられた桓武平氏の運命である。平家物語は「驕れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」と謡う。それは平氏の子孫である驕れる藤尾の滅亡を意味する。

次に『我の女は虚栄の毒を仰いで斃れた』―これは蛇の毒によってプライドの維持を択んだクレオパトラの最期であり、彼女に例えられた藤尾の、内なる大蛇の毒による死の結末である。彼女の亡骸に掛けられた友禅の小夜着の模様は「片輪車」である。この「片輪車」は意匠として見れば「川を流れる一輪車」であり、オフィーリアの最期となる。また日本の怪談として見れば「美女の顔を持って炎のように走り、それを見たものは呪われる」という一輪車の妖怪となる。そして人として見れば「愛すること」と「愛されること」の「二輪」があってこそ真実の愛が成立するのに、「愛されること」一輪しか持っていなかった藤尾の愛が「片輪」であったということになる。

そして北枕に『逆(さか)に立てたのは二枚折の銀屏である』―これは小野さんの性格の二面性と銀時計を表している。その小野さんという屏風の上には藤尾という虞美人草が描かれている―『柔婉(なよやか)なる茎を乱るるばかりに描(かい)た。不規則にぎざぎざを畳む鋸葉(のこぎりば)を描(か)いた。緑青の尽きる茎の頭には、薄い弁(はなびら)を掌ほどの大(おおき)さに描た。茎を弾けば、ひらひらと落つるばかりに軽く描た。吉野紙(よしのがみ)を縮まして幾重の襞(ひだ)を、絞りに畳み込んだように描いた。色は赤に描いた。紫に描いた』―右に左に我という針で不規則に男を翻弄する女という脆き花は、茎を弾けば散ってしまう程度の軽きものである。その花びらに刻まれた幾重もの襞は女の楽しみの襞である。その花は『凡てが銀(しろがね)の中から生える。銀の中に咲く』―即ち虞美人草である藤尾の愛の全ては、小野さんの銀時計から生まれて咲いた。そして『香(におい)は仏に似ている。色は流るる藍である』―目に見えぬ香りは詩であり、目に見える藍(愛)は現実である。『時に燃え尽した灰がぱたりと、棒のまま倒れる』―まるで「我」が折れるかのように。そして『燃えきった灰は、棒のままで、はたりはたりと香炉の中に倒れつつある。銀屏は知らぬ間に薫(くゆ)る』―灰になったエゴイズムは原形を維持して香炉の中に倒れながらも、その香りは知らぬ間に小野さんを包む。『隣室の線香が絶えんとする時、小野さんは蒼白い顔を抑えて来た。藍色の烟は再び銀屏を掠めて立ち騰(のぼ)った』―藤尾の愛は再び銀時計の小野さんを掠めた。死してなお立ち上る女の情念―それが憐れむべき藤尾の愛の姿である。(2013.10.4)